

漢詩人廣瀬林外の研究（序章）

大分県地方史研究会 秋月立雄

はじめに

これまでの咸宜園研究の中心は塾主廣瀬淡窓を中心になされてきた。そのため、淡窓の後継者である廣瀬青邨や林外については詳しく研究されてこなかった。本報告は、この研究史を補う意味で、廣瀬林外について扱う。

廣瀬林外（1836～1874）は、咸宜園四代目塾主。廣瀬淡窓の末弟旭莊の子。天保14年（1843）12月、咸宜園入門。嘉永4年（1851）に淡窓の養子となる。安政3年（1856）3月に月旦評を除名され、同月に咸宜園での名号が「若先生」となる。その後、咸宜園塾主となった。明治4年（1871）に上京するも、明治7年（1874）に死去。

咸宜園が漢詩教育に力を注いでいたことは知られており、林外も多くの漢詩を残している。林外の漢詩は清浦奎吾編『林外遺稿』に収録される『林外詩稿』により確認できる。しかし、林外の漢詩人としての認知度は淡窓、旭莊に比べて低い。

ただ、廣瀬林外の漢詩を読み解くことは、これまであまり知られなかった林外の生涯を知るうえでも重要と考える。そこで『林外詩稿』に載せられた漢詩の成立時期を、林外の日記などより明らかにする。また林外の漢詩を紹介し、幕末における廣瀬林外について考えてみたいと思う。

1. 『林外詩稿』と『林外遺稿』

『林外遺稿』の凡例によれば、『林外詩稿』は明治4年までの漢詩と病中の漢詩2首（おそらく明治7年）の漢詩を載せる。289題（445首）の漢詩を上下巻に収める。漢詩には評の載るものもある。「序」「跋」「凡例」は載らない。

なお、『林外遺稿』は咸宜園で林外に学んだ清浦奎吾により編纂された。昭和3年（1928）に刊行。5冊10巻。

2. 諸史料について

①日記

『林外日記』 廣瀬先賢文庫蔵。大正2年に廣瀬本家の廣瀬貞治が林外の残した日記をまとめて成立。嘉永2年1月1日～明治4年11月5日の日記。途中、日記を中断している箇所もある。

また、林外は慶応3年4月より江戸に行っている。そのことを記した『入関録』『謁晃録』『異聞録』が、『林外遺稿』に収録されている。慶応3年10月4日～12月26日の日記。

②草稿

廣瀬林外の残した漢詩の草稿が、廣瀬先賢文庫、廣瀬青邨文庫に残されている。これらの草稿には、『林外詩稿』に載せられた漢詩が確認できる。

⇒日記や草稿の検討の結果、『林外詩稿』の漢詩は成立時期の順番で載せられている。

3. 廣瀬林外と長三洲

幕末、佐幕と倒幕の議論のあったことはよく知られている。

日田は天領だったこともあり、咸宜園塾主であった廣瀬林外は、幕府側の立場に立ち窪田郡代に従っていたことが確認されている。

ただ、咸宜園で林外とともに学んだ長三洲は高杉晋作の奇兵隊に加わり、倒幕活動を行った。幕末における廣瀬林外と長三洲の関係について、林外の残した漢詩を参考に確認したい。

なお、幕末の長三洲については、中島三夫『長三洲』（1979年、以下「伝記」）、西江錦四郎「長州藩時代の長三洲」（『国士館大学経済研紀要』29、2017年、以下「西江論文」）を主に参考にした。

長三洲と幕末 その1

長三洲（1833～1895） 日田郡馬原村の人。通称を光太郎、字を世章、号を三洲。長梅外の子。弘化2年（1845）10月に咸宜園入門。しかし伝記によれば、入塾の費用が足りなかったため、一旦、咸宜園を去る。弘化4年（1847）に咸宜園に再度入門。廣瀬林外、田代潤卿とともに「宜園三才子」と呼ばれた。嘉永3年（1850）4月に咸宜園を退去した。安政2年（1855）より大坂の廣瀬旭荘の塾で都講として在籍。「三洲長君墓碑銘」によれば、大坂で土浦藩士大久保要より尊王攘夷思想の影響を受けたとある。伝記や西江論文でも、大坂で長三洲が尊皇攘夷の思想を抱くようになったと述べている。安政4年（1857）閏5月に旭荘の塾を去った（廣瀬旭荘の日記『日間瑣事備忘』）。伝記では「永い間心に抱いてた尊王攘夷思想をいよいよ実行に移すための門出であった」としている。

※伝記によれば、旭荘の塾を去った後、長州藩に立ち寄り、「萩では土屋矢之助（蕭海）、中村道太郎（道太）、桂小五郎（木戸孝允）らに迎えられ、藩主毛利敬親公に引合わされた」とある。西江論文にもほぼ同様の記述がある。

□安政4年7月3日、長三洲、咸宜園を訪れる。

伝記では長三洲は林外らに会い「ここで一同に自分の志を打明けた。皆んな彼の決意（＝尊王攘夷思想／報告者註）に賛同し、くれぐれも用心するように注意して、出来る限りの援助を約束した」とある。また、西江論文では7月7日に廣瀬青邨ら咸宜園出身者と会い、「攘夷倒幕を表明した」とある。

□安政4年10月29日 長三洲、咸宜園訪問。

□安政5年（1858）正月16日 長三洲、咸宜園訪問。

□安政5年11月1日 長三洲、咸宜園訪問。

伝記では「五岳、夕田、青村、林外らは、淡窓の命日に参集した人々に光太郎の志（＝尊王攘夷思想／報告者註）を伝え、ひそかに支援と協力を頼むのであった」とある。

□万延元年（1860）3月、長三洲、長州藩の明倫館の助教となる（『防長回天史』）。

西江論文では「明倫館助教に採用され後に長州藩士に就いた」とある。

※文久3年（1863）6月、長州藩士高杉晋作、奇兵隊編成の建白書を藩主毛利敬親に提出。許可される。西江論文では奇兵隊に「当初から入隊していた」とする。なお、中島久夫氏は長三洲の奇兵隊加入を元治元年（1864）と考える。

長三洲と幕末 その2

□文久3年7月7日に長三洲、咸宜園訪問。

伝記によれば、文久3年に長三洲は日田代官より追われていた。西江論文でもこの時「日田代官所の尊攘派志士の追求は厳しくなっていた」と述べる。

『林外日記』文久3年7月25日条に「上_二遠思楼_一作_二古味堂焚詩序_一」（返り点は報告者）とある。「古味堂焚詩序」は、『林外遺稿』収録の『林外文稿』、長三洲の遺稿『三洲居士集』にある。長三洲の詩稿の序文として書いたもの。古味堂は長三洲の号。

「古味堂焚詩序」に「今茲之秋、世章自長至、慷慨激昂、縦論當世之務（今茲の秋、世章、長より至り、慷慨激昂、当世の務を縦論す）」とある。林外と三洲が「當世之務」について議論していたことが知られる。

また、「古味堂焚詩序」で長三洲について、

【本文】

丑寅以来。天下始多事。世章走_二京攝_一。寓_二干防長_一。與_二海内個儻之士_一交。其行事卓犖。

令和3年度咸宜園教育研究センター研究奨励事業

非_レ復_レ昔日之世章_一。今也長有_レ佛之警_一。薩有_レ英之寇_一。而戰之與_レ和。国是紛紜。天下之事。未_レ可_レ測知_一。世章將_下以_レ功業_一自奮_上矣。

【読み方】

丑寅以来、天下始めて多事、世章京撰に走り、防長に寓し、海内^{てきとう}僮の士と交わり、其の行事^{たぐらく}卓犖、また昔日の世章に非ざるなり。今や長に佛の警あり、薩に英の寇あり、而して之と戦うと和すると、国是紛々として、天下の事未だ測り知るべからず。世章の功業を以て自ら奮わんとす。

長三洲が咸宜園を去った時期は『林外日記』からは明らかにできない。なぜなら同年8月に林外は大坂へ行ったためである。そして、おそらく大坂より戻った後に次の漢詩を詠んでいる。

【本文】

聞_三世章遭_レ捕遂_一悵然有_レ作

復聞捕_三范滂_一。誰起_三黨錮獄_一。書生唱_三清議_一。定非_三一身福_一。回_レ首彦山雲。今夜何處宿。

【読み方】

世章、捕遂に遭うを聞く。悵然として作有り。

また聞く、^{はんぼう}范滂を捕らうと。誰か^{とうこ}黨錮の獄を起こすや。書生の清議を唱ふるは、定めて一身の福に非ず。首を回して彦山の雲、今夜は何處に宿るや。

林外は大坂より12月3日に府内に着き、12月9日に日田に着いている。『林外詩稿』の順序より「聞_三世章遭_レ捕遂_一悵然有_レ作」はその間に詠まれたと思われる。林外は長三洲を范滂にたとえ、「范滂を捕らうと」と詠んでいる。范滂は『後漢書』巻67に見える。宦官により腐敗した政治を改めようとしたが果たせず捕縛され、獄死した人物。

また、この漢詩について長三洲による「林外廣瀬君墓碑銘」に次のようにある。

【本文】

我昔逃_レ難彦山雲、緹騎追奔猛火焚。君賦_三詩句_一復_三我冤_一、比_三我范滂_一招_三我魂_一。

【読み方】

我昔、難を逃る、彦山の雲。^{ていき}緹騎追奔して猛火焚く。君、詩句を賦して我冤を復す。我范滂に比して我が魂を招く。

当時、彦山は尊王攘夷論者の多かった長州藩と組する山伏が多かった。

『尊攘奇聞英彦山義僧傳』によれば、文久3年に奇兵隊士椎木熊吉郎・山田造造太郎の2人が彦山を訪れ、攘夷に消極的な小倉藩を内部から崩す相談を行った。『奇兵隊日記』文久3年8月13日条に「椎木熊吉・山田幹太郎為探索小倉彦山其外へ罷越候事」、『同』文久3年8月21日条に「椎木熊吉・山田幹太郎九州彦山より帰陣之事」とあるのは、この

ことに関係するものか。

文久3年11月に彦山の最高責任者政所坊らが小倉藩により捕縛されている。

『小倉藩攘夷記』文久3年11月15日条

一、日田郡代屋代増之助ヨリ浪士様ノ者、英彦山ニ入ルヲ報告ス、然ルニ今夏来該山座主ヲ首トシ、役僧等浪士ニ接シ頗ル疑フヘキ者アルヲ以テ、政所坊・正応坊・義俊坊ヲ小倉ニ拘引シ之ヲ糾問セシニ、義俊坊乃チ座主並ニ役僧等、長州藩ノ奨励ニ従ヒ攘夷ヲ事トセントシ、変名ノ連署状ヲ長州ニ送ラントスルヲ首白ス。

「三洲長君墓碑銘」に「君亦説彦山僧徒。及二豊艸莽志士應之。小倉藩吏探知。將捕君。僅免」(返り点は報告者)とある。また、長三洲の履歴書によれば、文久3年に「勤王ノ為メニ幕府ノ逮捕ヲ逃レ長州ニ逃ズ」とある。『尊攘奇聞英彦山義僧傳』でも長三洲が小倉藩の捕縛の行われる前に彦山を訪れていたことが確認できる。

□長海外、渡邊鼓岳あて書簡 文久3年12月13日(T-0093/『三洲長茨著作選集 付作品目録・略伝』)

光太郎も十月始また日田へ参り、爾今帰宅仕らず、彦山へ招かれ登山仕り候事は確かに聞き及候が、その後彦山は小倉より手ひどく取り押さえられ候様申し候。もつとも、光太郎は彦山へは居り申さぬ由範治より知為し、大方は長州へ渡り候や共存じられ候。真瀧坊も定て御地にも参らずと存じられ候が、如何御聞きの処御知為し下され候。

※『三洲長茨著作選集 付作品目録・略伝』はこの書簡を文久2年12月13日のものとするが、内容より文久3年12月13日としてよいと思われる。

以上が「聞世章遭捕遂悵然有作」の詠まれた背景である。林外は長三洲が捕縛されたと噂を聞き、この漢詩を詠んだのであろう。

窪田郡代と廣瀬林外

□元治元年3月8日 窪田郡代、日田に着任。

□慶応2年(1866)6月6日 第二次長州征伐・小倉戦争出陣のために窪田郡代とともに林外、小倉へ行く。井上義巳氏は林外の立場について「窪田郡代の戦陣の中の祐筆役のみならず、人数と軍資金の調達までを引き受ける軍政顧問役というきびしい任務を負わされて」いたとする。しかし小倉城は落城する。

□慶応2年 8月2日 小倉からの敗残兵が続々と日田に避難しており、咸宜園は閉鎖。

□慶応2年12月1日 咸宜園再開。

12月18日 制勝隊を東家に置き、林外は制勝隊の教授となる。

□慶応3年(1867)4月8日 林外、窪田郡代の命により江戸へ行くため日田を発つ。

10月13日 窪田郡代の子泉太郎を訪ねる。

10月27日 川路聖謨を訪ねる。

令和3年度咸宜園教育研究センター研究奨励事業

11月4日 林^{かくりょう}蘊梁を訪ねる。

11月5日 日田の前郡代屋代忠良を訪ねる。

※林外は慶応4年(1868)9月に日田に戻るが、慶応4年正月に窪田郡代は日田を去っている。林外は窪田郡代に従っていたが、井上義巳氏は林外が「自分自身と咸宜園とが生きていく途は、官府側の命令に従順であること以外にないと考えたことも十分推測しうる」と述べる。

長三洲と幕末 その3

長三洲は慶応4年の鳥羽伏見の戦いに参戦。後に奥州征討に従軍し、会津攻略の後に長州に戻る。明治2年(1869)2月に長三洲は日田に戻り、林外と会っている。林外は次の漢詩を長三洲に贈っている。

【本文】

長三洲自_二北征_一帰。酔中賦贈 己巳

霹靂震_レ天萬砲飛。黒雲中閃錦繡旗。六月蹂躪越山雪。袍上氷柱赤参差。

三隈春風楊柳緑。不_レ聞_二鼙鼓_一聞_二絲竹_一。請君勿_レ駭醉人耳。且唱越女歌一曲。

【読み方】

長三洲北征より帰る。酔中賦して贈る。己巳

霹靂天を震わし萬砲飛ぶ。黒雲中に閃く錦繡の旗。六月蹂躪す越山の雪。袍上に氷柱 赤く参差す。

三隈の春風楊柳緑なり。鼙鼓を聞かず絲竹を聞く。請君駭くなかれ酔人の耳。且つ唱う越女の歌一曲。

題にある「北征」とは長三洲が東北征討に参加したことであり、この表現は新政府側のものである。ここから林外に倒幕思想を想定することもできそうだが、「六月蹂躪す越山の雪」という表現は「北征」への批判のようにも受け取れる。「北征」という表現は明治になり、林外が受け入れることができた、ということか。

長三洲はその後、上京し明治3年に新政府の太政官権大史、明治5年に文部少丞となり、学制の起草に関わることになる。また、林外が上京した際には、彼を正院修史局に勤めるよう手助けをしている。そして明治7年に林外が死去すると、その墓碑銘を長三洲は書いている。

おわりに

廣瀬林外は生涯に多くの漢詩を残している。それは『林外詩稿』にまとめられている。これ

は廣瀬林外の漢詩を成立時期の順序で並べられていた。

また、本報告では幕末の廣瀬林外について、長三洲との関係から述べた。

長三洲を知るうえで、伝記は必須であるが、学術論文ではないため、その出典が不明なものも多い。また、西江論文は学術論文ではあるが、出典の確認できない記述もある。幕末の長三洲については検討すべき課題が山積している。

長三洲に関する漢詩を紹介したが、長三洲の「北征」については具体的に調べることができず、漢詩の説明も表層的なものでしかなかったことは反省し、今後の課題としたい。

廣瀬林外の父親旭荘は林外に多くの影響を与えたと思われるが、西江錦四郎氏は旭荘を「攘夷倒幕論者」ととらえている。その根拠として、旭荘が幕政批判をした『識小篇』を著していること、旭荘が尊皇攘夷論者と多く関わったこと、旭荘の門下生から多くの尊王家を輩出したことを挙げるようである。しかし、『識小篇』については内容が確認できないため、そこから旭荘の倒幕思想を導けるかは不明である。また、旭荘が尊皇攘夷論者と関わったことより「攘夷倒幕論者」とすると、林外は長三洲と深い交友関係を持っていた。しかし、林外が倒幕思想を持っていたかは不明である。江戸で幕臣や前郡代を訪問していることを考えると、考えにくいのではないか。

廣瀬林外については、これまで研究が少なかったこともあり、その生涯等について不明な点が多い。廣瀬林外について知る上で、彼の残した『林外日記』等の日記の精読は必須である。また、『林外詩稿』の漢詩を読むことも、林外の理解に繋がる。それが成立時期の順序で並んでいたことが確認できたので、林外の生涯をより豊かに理解することに繋がると考える。

【参考文献】

- ・中島三夫編・刊『三洲長苳著作選集 付作品目録・略伝』（2003年）
- ・西江錦四郎「廣瀬淡窓門下の尊王・攘夷・倒幕論の系譜」（『廣瀬淡窓・咸宜園に学ぶ一咸宜園教育顕彰事業優秀賞受賞記念誌一』公益財団法人廣瀬資料館、2021年）
- ・中島久夫「三洲と松菊一長三洲著「内閣顧問木戸公行述」に寄せて一」（『廣瀬淡窓・咸宜園に学ぶ一咸宜園教育顕彰事業優秀賞受賞記念誌一』公益財団法人廣瀬資料館、2021年）
- ・井上義巳「咸宜園をめぐる政治情勢一咸宜園と日田代官府との関係一」（『日本教育思想史の研究』勁草書房、1978年）
- ・池澤一郎「苔を二広の墓碑と合原松子の墓とに掃ふ」（『江戸風雅』3、2010年）
- ・長野覚「明治維新と英彦山山伏」（田川郡郷土研究会編『増補 英彦山』葦書房、1978年）
- ・一坂太郎『高杉晋作と長州』（吉川弘文館、2014年）
- ・『尊攘奇聞英彦山義僧傳』（日本史籍協会編『野史臺 維新史料叢書』十四、東京大学出版会、1974年）
- ・日本史籍協会編『奇兵隊日記 一』（東京大学出版会、1986年覆刻再刊）
- ・『小倉藩攘夷記』（宇都宮泰長編『小倉藩幕末維新史料』鵬和出版、2000年）